

2025年度 研究報告

附属竹早小学校

1. 研究内容

本校は、教育課程特例校として継続してきた「自己実現活動」を基盤に、子どもが主体的・協働的に学びを創造する教育課程の在り方を研究してきた。今年度は、自己実現活動において見られる「活動はしているが学びが深まらない」「自己満足にとどまり活動が拡散する」といった子どもの姿に着目し、その背景と教師の関わりを明らかにすることを研究の焦点とした。教員アンケートの分析から、こうした姿の背景には、子どもが活動の拠り所となる「材」に十分にこだわっていないことや、活動の進め方や協働の見通しがもてていないことがあると整理された。そこで、「子どもの材へのこだわり」に着目し、材が「我事」となり、さらに「我ら事」へと広がっていく過程を、教師の関わりとの相互作用の中で捉えることを研究内容の中核とした。そして、研究テーマを「子どもの材へのこだわりを生み出す「自己実現活動」の創造 — 材が「我事」から「我ら事」へと変容する教師の関わりとは —」に設定した。

2. 研究方法

研究は、校内研究会を中心に、実践と協議を往還させながら進めた。まず、教員アンケートの自由記述を分析し、「気になる子どもの姿」と「教師の関わり」に関する視点を整理した。その上で、素材・教材・材の概念整理を共通理解とし、学年部提案による授業実践を通して、「材へのこだわり」がどのように立ち上がり、変容するのかを検討した。協議では、子どもの発言・記述・行動といった事実に基づいた分析を重視し、拡大校内研究会では低・中・高学年の実践を比較する形で研究を深めた。

3. 研究履歴

日時	研究概要	講師
6月17日(火)	○第1回校内研究会(研推部提案) ・テーマ:「東京土産のその先に」 ・対象:第4学年1組児童 ・授業者:幸阪創平	-
7月7日(月)	○第2回校内研究会(中学年部提案) ・テーマ:「3年2組の活動を決めよう」 ・対象:第3学年2組児童 ・授業者:高須みどり	藤森裕治先生 (文教大学)
9月26日(金)	○第3回校内研究会(高学年部提案) ・テーマ:「見えないつながりを求めて」 ・対象:第5学年2組児童 ・授業者:恒川徹	松尾直博先生 (東京学芸大学)
1月20日(火)	○第4回校内研究会(低学年部提案) ・テーマ:「カイコとせんいを広げる?つなげる?」 ・対象:第3学年2組児童 ・授業者:窪田美紀	安藤浩太先生 (昭島市立光華小学校)
1月30日(金)	○第5回拡大校内研究会 ・テーマ:「いろいろためして『クラスのかつどう』をかんがえよう」 ・対象:第1学年2組児童 ・授業者:曾根朋之 ・研究協力者:白川治先生(お茶の水女子大学附属小学校) ----- ・テーマ:「わたしたちの防災の活動を進めよう」 ・対象:第4学年2組児童 ・授業者:鈴木侑 ・研究協力者:三村隆男先生(早稲田大学) ----- ・テーマ:「僕らのスポーツフェスティバル」 ・対象:第5学年1組児童 ・授業者:早川光洋 ・研究協力者:久保賢太郎先生(玉川大学)	大村龍太郎先生 (早稲田大学)
2月20日(金)	○第6回校内研究会 テーマ:「幼稚園における遊びの『きっかけ』から「広がり」へ—教師の援助の視点で見ていこう—」 対象:竹早園舎園児 授業者:町田理恵	田代幸代先生 (共立女子大)

4. 成果・課題・展望

【成果】 第一に、「こだわり」を活動の選択や意欲の強さではなく、材との関わりの中で意味を生成・更新し、他者と共有していく過程として捉える視座が校内で共有された。第二に、問い返しや価値付け、選択場面の設定など、教師の関わりが子どもの「我事」としてのこだわりを支え、学びを成立させる重要な役割を果たしていることが、具体的な実践を通して確認された。

【課題】 一方で、概念や比喻の抽象度が高く、研究の枠組みが十分に共有されにくい点が課題として挙げられた。また、子どもが意味づけを行う際の判断基準(尺度)が明確でないため、活動が拡散する可能性も指摘された。さらに、観察視点を授業中に即時的に運用する難しさや、子どもの理解の再構成をどのような手がかりから見取るかといった、見取りの精度に関する課題が明らかになった。

【展望】 今後は、「材へのこだわり」を教室内で生起する個と全体の相互作用として捉え直し、その相互作用を組織する教師の関わりを、具体的事実に基づいて検討していく必要がある。特に、「我事」として生まれたこだわりが、どのような教師の関わりを通して「我ら事」へと公共化されていくのかを学年段階を越えて整理し、特例校の実践を他校にも応用可能な条件として言語化していくことが今後の課題である。